

- 小豆地域は、オリーブを始めイチゴ、オリーブ牛など多彩な農産物が生産されており、観光地としての知名度も高いが、近年、高齢化や人口減少が進み、農地の荒廃や集落機能の低下が懸念されている。
- このため、普及センターでは、観光資源としての棚田保全、畑地だけの集落営農組織の育成、伝統ある食品産業との連携など、「小豆島らしい」集落営農組織の育成に取り組んだ。
- この結果、畑地だけの集落営農組織の誕生、農商工連携による新商品の開発、管内初となる集落営農法人が誕生した。

### 具体的な成果

#### 1 農業者の意識の向上

- 集落営農推進会や農地利用検討会を開催し、地域の実情に合った集落営農を提案することで、集落営農に向けての意識が高まった。

#### 2 「小豆島らしい」集落営農組織の誕生

- 平成29年度、畑地のみで活動する2組織が誕生した。  
(集落営農組織数：  
H28・5組織 →  
R2・9組織)



写真1：耕作放棄地を再生し果樹を植栽

#### 3 マッチングによる新商品の誕生

- 島の伝統ある食品産業と集落営農組織をマッチングし、バジルドレッシング等の新商品が開発された。
- 地ビール醸造に取り組む移住者が、「小豆島産原料100%」の地ビールを開発した。  
(マッチングによる新商品開発：H28からの累計・4商品)



写真2：ビール麦の収穫

#### 4 集落営農法人の誕生

- 構成員17名で、管内初となる集落営農法人が誕生した。

### 普及指導員の活動

#### 平成28～30年度

- 農地の利用状況調査に基づき、座談会を重ねた。
- 「小豆島らしい」畑地だけの集落営農組織の育成に取り組んだ。
- プロジェクトチームを結成し、食品産業と集落営農組織のマッチングに取り組んだ。

#### 令和元年度

- 法人化を加速させるため、専門家で構成する経営戦略会議の支援対象に位置付けた。

#### 令和2年度

- 法人化に向けた検討委員会において、合意形成に向け検討を重ねた。
- 県域で開催されていた「地域活性化研修会」や「農作業安全研修会」を地域の実情に合わせて、独自開催した。

### 普及指導員だからできたこと

- ・ 地域をまとめるコーディネーター役として町やJAと連携し、集落営農組織の育成や食品産業とのマッチングを推進した。
- ・ 補助事業の活用や専門家の派遣など、効率的・効果的な支援が行えた。
- ・ 経営担当と各専門担当が連携し、組織の運営から作物の栽培技術まで、一貫して支援することができた。

香川県

# 「地域活性化」を軸とした集落営農の取り組み

活動期間：平成28年度～継続中

## 1. 取組の背景

小豆管内は、島しょ部特有の狭小で不整形かつ傾斜に位置する農地が多いが、中山の棚田など地域の観光資源としても維持が重要であり、その受け皿として、集落営農組織を位置付けている。

普及センターでは集落営農組織として、小豆島町安田の「東條地域農業集団」、土庄町伊喜末の「小豆島陽当の里伊喜末」、小豆島町中山の棚田の取組み、さらには、鳥獣害対策として集落ぐるみの活動など6組織を支援している。

地域農業の担い手は小規模な農業者が中心で、集落営農組織などの受け皿がない地域では、小規模な農業者が水稻を中心に農地を管理している。

しかし、リタイヤや鳥獣被害により、不作付地の増加など農地の機能維持のほか、地域住民にとっても住環境の悪化などが懸念され、地域の活性化やにぎわいが失われる恐れがある。

今後、農地の維持・管理を中心に、観光資源としての棚田保全、集落ぐるみの鳥獣害対策、また、住環境保全として農業者と地域住民を巻き込んだ地域活性化が重要であり、これらの活動を令和元年度から「小豆島らしい集落営農」と位置づけ普及活動に取り組んだ。



小豆島町中山地区の虫送り

## 2. 活動内容（詳細）

### (1) 地域での合意形成に向けた提案活動

普及センターだよりを活用した啓発活動や水稻栽培講習会などの機会を利用し、5年、10年先の集落について、地域住民皆で問題意識を共有することや、「集落は人材の宝庫」であることを認識し、まずは家族内から話し合いを行うよう伝えた。



農作業安全研修会

また、日ごろから農業者の意見・要望を集約し、地域の実情にあった集落活動を提案した。

#### (2) 地域を支える新規オペレーターの発掘

3月に農作業の安全推進やAI技術などを導入した農業機械を紹介する「小豆地区農作業安全研修会」を開催した。

若手農業者などに関心の高いドローンやラジコン草刈機の実演を行い、誰でも操作が容易に行えることを強調し、オペレーター候補者の掘り起しを行った。

#### (3) 地域活性化研修会の開催

普及センターでは、耕作放棄地や鳥獣害対策などによる「農地の機能維持」や、棚田など地域観光資源を生かした「にぎわいづくり」など、地域住民が参加する集落活動が重要と位置づけており、「農業者や地域住民がワンチームとなり皆が輝ける地域づくり」をコンセプトとして11月に「小豆島らしい地域活性化研修会」を開催した。



小豆島らしい地域活性化研修会

#### (4) 重点指導対象の経営発展支援

「東條地域農業集団」では、ブランド米「安田の郷コシヒカリ」の高付加価値化として「オリーブ堆肥」を用いた実証ほの設置、「コシヒカリ食味コンクール」を開催し、食味の高位平準化を図った。

「小豆島陽当の里伊喜末」では、地元産原料を使用した「地ビール」原料のビール麦などの安定生産を支援し、経営所得安定対策の交付対象へ誘導した。



地域特産物の展示紹介

小豆島町中山地区では、農業者個々では機械整備が難しく、今後、棚田の保全活動が課題となることから、小豆島町農林水産課と連携し、県補助事業を活用した機械導入を検討した。

#### (5) 集落営農法人化支援

小豆島町安田の「東條地域農業集団」の維持に向けて、集団内に新たな担い手が必要と訴え、集落座談会の開催とともに、令和元年度に関係機関・団体を交えての法人化検討委員会を設立・検討し、新たな担い手として「集落営農法人」との結論に至った。その後、法人設立発起人会を立ち上げ、当面は作業受託を中心とした法人を令和2年度中に設立することとした。

### 3. 具体的な成果（詳細）

- (1) 普及啓発活動により、農業者から「集落営農について具体的に知りたい」や「集落座談会を開催したい」などの要望が土庄町豊島唐櫃地区などから寄せられ、座談会開催に向けて検討を行った。
- (2) 「小豆地区農作業安全研修会」参加者で、法人化を予定している集落営農組織から、県補助事業などを活用し、農業機械導入と集落内外からオペレーターを募りたいとの要望が寄せられ、今後、定例会で導入に向けた検討を実施することとした。
- (3) 地域活性化研修会開催により、町役場やJAなど関係機関・団体への集落営農を中心とした地域活性化への関心が高まった。特に小豆島町では中山の棚田が観光資源でもあり、本研修会を契機に機械整備を実施することとなった。
- (4) コシヒカリ食味コンクール開催により、良食味米生産と水稻作付意欲の向上が図られた。  
また、次年度は管内全域でコンクールを実施する計画を関係機関と調整する。地元産原料を100%使用した「地ビール」は、令和3年5月に誕生予定であり、6次産業化の成功事例として、小豆島全体の活性化につながると期待される。
- (5) 「東條地域農業集団」の新たな担い手として、令和3年3月に「農事組合法人小豆島」の創立総会を開催、令和3年度に法人登記し、当面は作業受託を中心としたオペレーター組織としての役割を担う。

### 4. 農家等からの評価・コメント

（東條地域農業集団）

当地域の農業を維持していくには、集団内に新たな担い手が必要とのご提案を受け、集落で法人化に向けた話し合いを行い、令和元年度に関係機関・団体を交えての法人化検討委員会を設立した。

そして、令和3年3月に「農事組合法人小豆島」の創立総会を開催し、小豆島で初の集落営農法人を設立した。今後、令和3年度に法人登記し、当面は作業受託を中心としたオペレーター組織としての役割を担っていきたい。

（小豆島陽当の里伊喜末）

小豆島で地ビール醸造所を営む中田雅也さんをご紹介いただき、地元産原料を100%使用した「地ビール」の開発に向けて、ビールの原料である二条大麦やホップの栽培に取り組んできた。試行錯誤しながらの栽培であったが、安定生産に向けてご指導いただき、令和3年5月に地ビールが誕生予定である。完成した地ビールは島内外へ発信し、小豆島全体の活性化につなげていきたい。

## 5. 普及指導員のコメント（小豆農業改良普及センター 副主幹 三木 洋）

島しょ部では、担い手のリタイヤや鳥獣被害により、不作付地の増加など農地の機能維持のほか、地域住民にとっても住環境の悪化などが懸念されていた。

そこで、耕作放棄地や鳥獣害対策など農地の維持・管理を中心に、観光資源としての棚田保全や集落ぐるみの鳥獣害対策、地域での合意形成に向けた提案活動、住環境保全として農業者と地域住民を巻き込んだ地域活性化対策に取り組んだ。

これらの活動により、小豆島で初の集落営農法人が設立されるほか、農商工連携による地元産原料を使用した「地ビール」が誕生するなど、島の活性化につながった。今後も、「小豆島らしい集落営農」を推進し、小豆地域の活性化に取り組んでいきたい。

## 6. 現状・今後の展開等

引き続き、「地ビール」原料生産など地域の特色ある取り組みや、小豆島で初の集落営農法人の経営発展支援、また、棚田を代表とした観光資源を生かし、地域住民が参加し地域活性化を軸とした「小豆島らしい集落営農」を定着させる。